

INTERVIEW：インタビュー

ヘア・アーティスト

吉田 潤さん



イメージ動画に関与された方のインタビュー連続企画の第2弾は、動画にご出演いただいたヘア・アーティストの吉田潤さんです。吉田さんは、黒木瞳さん、浜崎あゆみさん、神田うのさんといった芸能界の方々のヘアメイクも担当されており、業界でもカリスマ的な存在です。そんな吉田さんに、美容師として大切なことからイメージ動画出演の経緯まで、色々とお話を伺ってまいりました。

(聞き手・構成：西岡 毅、
山内 一浩、雨宮 慶)

東京弁護士会イメージ動画「寄り添う」
<http://www.toben.or.jp/message/toben-tv/post-419.html>

1 美容師としてのキャリア

——まず、美容師を目指されたきっかけを教えてください。

環境が大きいと思います。母が美容師をしていて、母のお客さんには芸能関係の方が多かったのです。それで母が仕事で行く場所、例えば「夜のヒットスタジオ」のヘアメイクの現場に、子どもの頃に一緒に行ったりしていました。座っていると、近くに山口百恵さんや桜田淳子さんがいたり……。

それと美容師の兄の影響も大きいです。私がいざ進路を決めるとき、兄がその当時、日本のトップといわれているお店にいまして、ヘアショーを見に行きました。「きらびやかな美容師さんの世界はやっぱりカッコいい」、「美容師の道に行くことが、普通の人よりも成功する近道なのかもしれない」というちょっとずるい考えもあったり。

あとは、子どものころから周りに住み込みの美容師さんがいたりして。やっぱり環境がそうさせたというのが一番ですね。

——住み込みで働いている美容師さんというのは驚きです。

今でも地方に行くと多いですね。美容室は、今では企業のようなスタイルになり始めていますが、住み

込みの小僧から始まるという形も、まだどこかに残っているんじゃないかなという気がします。僕らがこの世界に入ったときは、「給料をもらって技術を教わるなんて、とんでもない話だ」というような世界でした。

母は日本髪が得意なんですけど、いろいろなピンを改造して何か使ったりするものというのは、今の美容師には分からないかもしれません。僕は別に教わったわけじゃないですけど、知らずに見ていたんでしょう。

——そういう徒弟制度のもとで、美容師の方が独立するのはどんなきっかけなのでしょう。

以前は、師匠から、「なかなかこいつはやるようになったな。のれん分けしようか」と声をかけられるか、それともそろそろ自分でやるかという感じでした。時期としては、10年一区切りみたいな目安ですね。でも、最近は、SNSの普及で、独立の仕方や、さらには営業の仕方も大きく変わってきましたね。

——どんな風に変わったのでしょうか。

SNSにすべて破壊されたと思いますね、私たちの今までの美容師の世界観が。例えば営業だったら、昔は色んな所へ名刺を持って行って、「僕は美容師をやっているの、よろしくね」だったんですけど、最近では自

撮りした写真をSNSにアップして、「今なら何%の割引をするよ、Yeah!」みたいな、何か変な世界になっちゃって。今は信号機の数よりも美容室があるので……。

ただ、だからといって、それを否定し続けてもしょうがなくて、やっぱり同化しないといけない。同化するのに、自分がプライドを捨てなきゃいけないこともたくさんあったりしますね。逆に、SNSの普及で良くなっていることも、すごくあると思います。

—— どういうところが良くなりましたか。

例えば、海外の雑誌、『VOGUE』、『marie claire』なんかですぐSNSでも見られるし、いろいろなモデルさんが、自分のSNSに写真を挙げているような時代ですから、勉強しようと思えばいくらでも勉強できる。だからチャンスはものすごい広がっているんですけど、勉強する人としらない人がすごく二極化されている感じがします。昔はもう頑張って頑張りを抜くみたいな感じだったんですけど、今ってどれだけ頑張らないで座ってできるかということがすごくかっこいい、みたいなところがありますね。

2 大切にしていること

—— 美容師として一番重要なことを教えてください。

気遣いでしょうか。例えば、今、僕の腕時計のガラスに太陽が反射していて、「前に座っている方が眩しいだろうな」と、さっと時計を外せるような。そういうことがすごく大切だと思います。

—— 技術を磨くというようなことかと思いましたが、そうではないのですね。

やっぱり技術だけではない部分があります。僕のお客さんって、特にこだわりが強いと言われている人たちなんです。黒木瞳さん、浜崎あゆみさん、神田うのさんとか。そういう人たちが来てくれるという理由には、心の技術が重要というのが多分にありますね。すごく上手いけどぶっきらぼうの人か、技術は8割くらいだけどすごく良い人のどっちが美容師として上手く

いくなかといったら、たぶん後の方だと思うんですよ。

もちろん、文化継承やそれに伴う技術も大切です。吉田潤の作品について調べると日本髪が結構出てくるわけです。例えば20年前に若きカリスマといわれているころ——「若き」だったんですね——そのころには文金高島田を思いっきりやっているわけですね。文金高島田でも流行がありますし、そういう文化もちゃんと分かってかんざしの名前とかも全部分かっていないとなめられちゃうんですね。ですから技術もしっかりしているのは当然です。でも心の技術も同じくらい重要なんです。

—— 吉田さんは今でも技術の鍛錬をされていますか。

僕がうちの会社の中で一番練習しているはずですよ。練習のために、家の僕の部屋のテーブルの上には、いつも定規とコンパスとダイヤグラムを書いたものが置いてあります。

—— 定規やコンパスというと、まるで数学みたいですね。

カットは数学ですよ。床に対して何度、頭の形に対して何度で髪の毛を引き上げて、そこから対頂角に取ってこう切る、ここここは錯角だから同じ角度でしようみたいな具合です。

—— もっと感覚的なものかと思っていました。

例えば、僕は、岡本太郎さんのような日本の爆発したアーティストの方もすごく好きなんです。でも、一見ぱっとやっている中に完璧な技術がないと、それはただの偶然になってしまう。まず技術があって、それを崩して初めて成立すると思うんですね。

3 ライバル、後輩、そして自分

—— 吉田さんは美容師の世界では凄腕の技術者ということで講師活動もされていますが、他の人に自分の技術を教えることに抵抗はないですか。

自分の技術の9割は教えています。でも、残りの1割は、僕にとってはコーラのレシピみたいなものですから外部には教えません。

日本髪の文化を広めていかないと、という想いもありますしね。最近はみんなだいぶ日本髪、日本髪と言うようになってきましたけど、本当に皆さん結えないですよ。

——そんなトップランナーである吉田さんがこれまでお会いになった方で、才能や技術がこの人はすごいと感じた方はいますか。

1人だけいます。その方は埼玉にいる美容師で、圧倒的なパフォーマンス力があります。本当にかなわないかもしれないくらい。

もちろんその方以外にも上手い人はいると思うんですけど、他は全然何でもないと言ってないといけな世界なんです（笑）。そんなふうには他は大したことないと言いながらも、ちゃんと自分の技術は研いでおかないといけな世界。これがもう「誰にもかないません。もうあの人にもかないません」になっちゃったら、若い美容師はついて来ない（笑）。

——トップを走る者のプライドと追われる方の不安のような相反する意識が同居しているように感じます。

でも、「もっと追ってこい」、「何で美容師さんたちはこんなに元気がないんだろう」とすごく思うんですよ。例えば、僕は土曜日の営業を午後7時に終わらせた後、夜中にかけてクラブでパフォーマンスをして、日曜日の始発電車で帰ってきて、そのまま寝ないで仕事をしたりもするわけです。そういう元気のいい、威勢のいい美容師さんたちが周りにあまりいないですね。いたら拍手をしてあげたい（笑）。

——長くこの世界にいらして、一番満足されている成功のお話と、逆に何か失敗談があれば教えていただけますか。

まず失敗の方はお一人だけ。初めて来たお客様でストレートパーマをかけたいと言われて、普段通りにやったら根元が縮れちゃったんです。どうしてそうなったのかというと、実はその方はつい数日前に別のお店でパーマをかけていたので、その残留アルカリの前処理をする必要があったんです。口数が少ないお客様だったんです

けど、僕がもっともっと問診して、そういう話を聞いておけばよかった。これはもう言い訳なんかは全然利なくて、僕が悪い。これが最初で最後の失敗ですかね。

成功というのはこれ一つというのではなくて、積み重なっていると思うんですけど、うちのお店に10年以上長く勤めている美容師やスタッフがたくさんいるということ。これが一つの成功だと思っています。その10年選手には感謝しなきゃいけないなというのがすごくありますね。

4 東京弁護士会のイメージ動画

——弁護士との関わりについてもお聞かせください。美容師業界にも顧問弁護士というのは必要でしょうか。

今、「美容師さんたちで弁護士さんをお願いしてないところあるの？」と僕は聞きたいぐらい、美容師の義務かなという気がします。お守りみたいなつもりで顧問契約をしてほしいですね。今は何かのトラブルのときに、菓子折りを持って、「このたびはすみませんでした」という時代ではないと思うんですよ。相手に対するマナーとか、従業員に対する安心だったり。「うちの弁護士さんに相談しますね」というこの一言だけで、どれだけ街のパーマ屋が「あ、ちゃんとしているんだ」と思われるだろうかと。

本当は、トラブルはない方がいいと思うんです。顧問料というのは言わばお守りですから。熊手と一緒に、飾っておくというわけではないんですけど（笑）。でも、例えば、自分のお客さんを粗悪な薬剤から守るためとか、お客さんが何か言いたいことを僕らには直接言えなくて、弁護士さんとお話しさせてくださいということがあるかもしれない。

——美容師の方はどのように弁護士を選んだらよいでしょうか。

私はあるご縁がありまして顧問弁護士の先生にお願いをしているんですけど、人からの紹介というのは良いですね。あ、でも、信頼できる人からの紹介というのが大事ですが。

美容師として技術がしっかりしているのは当然ですが、心の技術も同じくらい重要。僕のお客さんにこだわりが強いと言われる人が多い理由は、ここに多分にありますね。

吉田 潤



最近、ネットで調べたら出てくるじゃないですか、弁護士さんって。一般の人はネットで調べて一番上に出てきたところが、ちょっと料金安そうだからといってそこに頼んじゃうということもあるかもしれません。僕はそういうのは、少しどうかと思います。

—— 弁護士にはどのようなイメージをお持ちですか。

やっぱり弁護士事務所というのは自分とは程遠い場所という感覚がありますね。僕が弁護士さんに電話して、「本日は法廷です」と言われたとき、「おー、すごい人に電話してしまったんだな」と思ったり（笑）。

そういう意味では、東京弁護士会のイメージ動画もすごく良かったと思うんですね。いろいろな業種の人が出てきて、あのような身近で暖かいというイメージがもっと普及すると良いですね。

—— ありがとうございます。当会のイメージ動画には吉田さんにもご出演いただきましたが、吉田さんが出演依頼を受けたとき、どのようにお感じになりましたか。

正直驚きました。やっぱり「え、何を作るのかな」とは思いましたよね（笑）。「弁護士会とイメージ広告?」、「どういうものになるんだろう」と思って。

—— 実際にご覧になった感想はいかがでしょう。

ああ、こんな風にできるんだ、と思いました。僕の「Twitter」で僕が出演していることをツイートしたんですが、「超面白い」とか「何で潤さん、出ているの」みたいな反応でしたね（笑）。みんな意外に思ったみたいです。

でも、せっかくなので、続編も作って、もっと色々なジャンル、例えばギャルもいたり、ママ友とかもいたりして、色んな方が弁護士とリンクしているんだということを世の中に分かってもらったら良いと思います。別に弁護士会の営業ということではなくて、弁護士会の守備範囲の1つとして世間の方に認知されるように持っていけたら良いと思います。子どもに怪我させちゃった、犬を散歩させたら噛みついちゃった、大家さんと揉めた。そういう身近なことが僕らの世界でいっぱい起きているので。今までは、弁護士さんという絶対的にかけ離れた世界だったんですけど、これから絶対的に近くなきゃいけない存在になってきていることは確かですね。

—— 最後に、吉田さんの理想の美容室のあり方を教えてください。

僕は1億円を売り上げる美容室ではなくて、1億人に来てもらえる美容室をやりたいですね。稼ぎとかはどうでもよくて、支持してくれる人が多い美容師になりたいですね。

—— 本日はありがとうございました。

プロフィール よしだ・じゅん

「ISM」代表。1967年生まれ。東京都出身。日本美容専門学校卒業。北千住、南青山に2店舗を構え、サロンワークはもちろん、TV、雑誌等、幅広いフィールドで活躍。従来のカット技術に加え、日本髪から現代風にアレンジした盛り髪を得意とし、「アゲ盛り」の生みの親でもある。髪を自由自在に操る確かな技術と感性により、多数のアーティストからの依頼も多い。